勇者日和

パズル４.８

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者日和

【Ｎコード】
Ｎ５６６５Ｍ

【作者名】
パズル４．８

【あらすじ】
とあるリヤドとよばれる国に、シャンシェンと呼ばれる村があった。その村は代々、リーガル家が収めていた。が、現当主になったインデル・リーガルは、その性格故になかなか当主としての役割を果たせないでいた。
そんなインデルを見かねたインデルの母、クー・ベルンは、インデルの無二の親友ジェークスに、リーガル家初の役職についてもらい、どうにかこうにか村は本来の姿に戻り一安心。
だが、そんな理不尽な事実をインデルが快く思うはずもなく……。

成り行きで何でもこなす、毒舌勇者とその親友ジェークス。
そんな二人が度胸試しなどという下らないライバル心と好奇心から、魔王を倒したらシャンシェン村の本当の当主になれるという、突拍子もない考えを思いつく。
勿論、魔王にとっては迷惑な話である。

第一章【リーガル家当主として】（前書き）

こんにちは。今回初投稿となります、パズル４．８でございます。色々とお見苦しい事もあるかとは思いますが、読んで頂ければうれしいです。

第一章【リーガル家当主として】

とあるリヤドとよばれる国に、シャンシェンと呼ばれる村があった。その村は代々、リーガル家がおさめており、現当主はまだ１５才になったばかりのインデル・リーガルであったが、インデルがあまりにも真面目に当主という大役をこなしてくれないために、村の人々は日々不安を覚えて過ごしていた。が、ある日インデルの不真面目さに見かねたインガルの母は、昔からよくインガルと遊んでくれた、義兄弟の様な
インガルの無二の親友、ジェークスにリーガル家当主補佐及び代役という、リーガル家初の役職を任せた。その効果は絶大で、インガルによってめちゃめちゃになっていた村の経済や政治など諸々の問題は見事に解決していき、ジェークスは更に新しい〝他村との交流〟をモットーに、毎日他村のお偉いさんにあっては村と村の結束力を高めていった。一方このころ、補佐役だったはずのジェークスに当主としての地位も人望もほぼすべてもぎとられてしまったインデルは、更にへそ曲がりになっていき、家に帰らない日が何日も続いていた。
「あぁ、もう。インガルには本当に困った。村のどんな問題でも解決できるはずなのに、インガルに関わる問題は全て未解決におわる。」
「ごめんなさいね。あの子、昔からこうだから。……本当、困ったわね」
ジェークスとインガルの母クー・ベルンは、今日もまた、解決できない唯一の問題に呆れ、ぼぅっと休日を過ごしていくのだった。
一方、インデルはというと、シャンシェンという自分の思い通りにならない村を出て、他村に住むインデルとは幼なじみのリーシャン・テルクという村娘に会いにいっていた。
山を越え、ふもとを少したどったところに彼女の住むリゼル村はあ

る。インデルは少し乱れた息を整えると、意気揚々とリゼル村の見張りらしき人物に話し掛けた。
「やぁ、おはよう。相変わらず、子ゴリラを産んだゴリラの母親の様な顔をしてるな」
インデルがそう言い、薄笑いを浮かべると中年ほどに見える男は「んだと？！喧嘩売ってんのか」といきり立った。
「はは、まぁまぁ。こうして会えたんだ、最初くらいは笑顔でいこう」
呑気なインデルに更に苛立ちを覚えた見張りはインデルに向けて槍を立て、「誰だてめェ！！」
と怒鳴りちらす。そんな見張りに少しも気圧されず、インデルはこう答えた。
「あの山を１つ越えた向こうにある、水の綺麗なシャンシェン村の現当主、インデル・リーガルだ。
一度、あった事はあるとおもうが」
リーガル、という単語聞いた瞬間、見張りは「なんだ、リーガル家のクソガキじゃぁねぇか」
とククッと乾いた笑いを零すと槍を下ろし、ドサッ、と音を立て地べたに座った。
「クソガキって……失礼だな、お前。仮にも当主だぞ？口を慎め」
そうインデルが当主らしい発言をすると、見張りははぁ、と溜息をつき、
「……おめェ、ジェークスっつう奴に地位取られちまったんだって？」
と呆れた声色で返した。インデルはピクッと反応すると、見張りと同じ体勢を取り、
「しょうがないさ。あいつは頭も良いし顔もいい。おまけに性格だって良い。あんなカンペキな人間、認めざるおえないだろ。」
そんなインデルの心ない発言に見張りはニヤッと何か企んでいそうな不穏な笑みを零すと、

「少しは努力したのか？」
といたずらっぽく笑った。
インデルはムッと顔を強ばらせると、すぐに「してない、どうせ勝てやしないさ」と返した。
「悔しいだろ？」
「……あぁ、悔しい。すごく。悔しい。」
「よし、お前、毎日夜になったら村を抜け出して、此処へ来い。俺が、お前のその根性たたき直してやる。ただし、お前が望んだ場合のみな。」
顔をうつむかせていたインデルは、見張りの突拍子もない考えに驚くと、すぐに、
「いいねぇ。ジェークスとは親友であるからこそ……何かあるんだよ、何か。」
「……ククッ、それがライバル心って奴じゃねぇのか」
それから見張りとインデルは暫く談笑し、インデルは機会を見計らって見張りに別れを告げた。
「じゃあな、サルのケツみてーな顔した見張りさん」
見張りは顔を歪ませると、
「最初より酷くなってるじゃねぇか。よし、良い度胸だ。今日はたっぷりしごいてやるからな」
インデルはにニヤッといたずらっぽく笑うと、
「それは俺のセリフだ。」
と言い残し、村に入っていった。後ろから「俺はエンニだ！！」と叫んでいたような気がしたが、インデルはそれに反応することは無かった。
村に入ると、先ほどの様なうっそうと茂った背の高い木々達はなくなり、山々に囲まれた広い草原にも似た地が顔を出した。
インデルは深く深呼吸をすると、
「本当に此処は綺麗なところだな。今度ジェークスに頼んで開拓してもらうか。ククッ、この綺麗な土地が俺のものになったらなぁ…

…もしくは壊したい」
「イン……デル…？　インデル……だよね？」
インデルの耳に、聞き慣れた心地よい声が入ってきた。
どうやら、インデルの本当の目的の人物に会えたらしい。

第二章【リゼル村の村娘】

「あ、よぅ。……久し、ぶり。」
「うん！暫く見ない間に大きくなったような気がする。」
「うるせーな。背の事は言わないでくれよ。」
「あはは。そういう所は昔とは変わっちゃったね。うん、あなたが変わったように、この村も色々と変わったんだ。だから、貴方の、インデルの期待しているようなものは何も無い。帰って」

やはり、駄目だった。
君は、俺の事を当主としか見てくれなくなった。
当主じゃないのに、そんな大きな器じゃ無いのに、俺を見る周りの目ばかりが目まぐるしく変わっていく。
そんな事、期待してないのに。
感情が高まりすぎた所為か、インデルは無言で涙を流し始めた。急な事にもリーシャンのインデルを見る目は変わらなかった。久しぶりに会ったというのに、二人の間はごちゃごちゃと様々なものが引っ掛かって、二人はお互いの感情を昔の様にぶつけられなくなっていた。インデルはどんなにおちゃらけていようと、人と人とのつながりは大事にしていたつもりだった。だからこそ、いつからか自分の素直を出せずにいたのだろう。悔しくても、悔しいと言うだけで、悲しくても、悲しいと言うだけで。涙を流したのは久しぶりだった。インデルははっと我に返ると、無理にニヤッと笑って見せて、
「何だよ、折角会いに来たのに。まぁいいや、それじゃあ帰るよ。」
「……さよなら」
自分の思いつきで自分が傷つき、泣いた。そう考えると今度は段々と恥ずかしくなってきた。
走り去ろうと大地を蹴り、一歩踏み出すと後ろからリーシャンの昔のようなあの元気な声が聞こえて来た。

「うそだよー、バーカ！毒舌魔術師はまた私には勝てなかったね。フフッ、今回は私の勝ちよー！」
その言葉を聞いて、インデルはふと遠い昔の約束を思い出した。そう言えば、いつかまた会ったとき、口先で相手を困らせよう。勝った方が負けた方に土下座する、というインデルにとってはこの上ない屈辱の罰ゲーム付きの長い遊びをはじめた時があった。
もしかして、あの遊びはまだ続いてたのか……？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5665m/

勇者日和

2010年10月11日21時29分発行